

1. 趣旨

生成文法では、統率束縛 (GB) 理論において、言語間の差異を統語演算体系内部のパラメーターで説明する試みがなされていたが、90 年代初頭から、説明的妥当性や言語習得の点から、狭い意味での統語演算体系 (narrow syntax) 自体ではなく、その外にある認識可能 (detectable) な体系に言語間の差異を求めるようになってきた (Chomsky 2001)。Berwick and Chomsky (2011:37) が指摘するように、内的な統語構造物 (internal syntactic objects) を外的な感覚運動体系 (sensory-motor system) で利用できる形に変換して外在化 (externalize) する形態音韻部門が、言語の多様性を説明する上で重要な役割を果たすと考えられる。この外在化は、広く言語学の各分野に関わるものであり、統語構造の線形化や形態的・音韻的現象およびこれらの相互作用など、様々な観点で研究をする必要がある。このワークショップでは、各講師が、音韻論、韻律音韻論、統語論、類型論の各分野で、回帰的併合、解釈可能性、統語移動、語順について、分野間のインターフェースを中心とした研究を発表し、参加者との全体討議を行うことで、外在化のメカニズムを明らかにしていきたい*。

2. 構成 (全体 120 分)

趣旨説明 (5 分)、各講師による発表と質疑応答 (25 分 × 4 発表 = 120 分)

参加者とのディスカッション (15 分)

3. 各発表の題目と要旨 (発表順)

1. 音韻論における回帰的併合 那須川 訓也

派生過程において、音韻系は次の二種類の役割を呈する。

(i) 統語構造を感覚運動系が解釈可能な表示にする。

(ii) レキシコンに蓄えられている形態素内音韻特性を、統語構造が構築されたあとに解釈する。

いずれにおいても、無の状態から音韻範疇を回帰的に併合して構造を構築する能力を音韻系は呈さないといえる。

これに対し、本稿では、音韻構造構築上の基本単位を、従来考えられてきた韻律点や分節ではなく、一值的でかつ独立解釈が可能なエレメントと呼ばれる素性 (IU A ? H L) であると見做し、それらが語彙化過程のもと、回帰的に併合されることで形態素内の音韻構造が形成されると考える。また、極小論に立脚したエレメントによる裸句構造を音韻表示で用いることで、韻律点や他の韻律 (音節) 構成素を言及することなく、エレメントの種類と階層構造上の位置づけのみを言及することで、音韻現象を分析することが可能となる。

2. 音韻的外在化と解釈可能性 土橋 善仁

Chomsky (2013, 2015) のラベル付与アルゴリズムでは、概念・意図 (CI) 及び感覚運動 (SM) インターフェースへの外在化の過程で同じラベルが必要であるとするが、外在化における解釈はほとんど

* 本研究は JSPS 科研費 15H03213 の助成を受けたものである。

検討されていないように思われる。たとえば、分散形態論の知見のもと、名詞は [n R] という形をもち、R ではなく機能範疇要素 n がラベルになるとされるが、韻律領域の形成に際して、機能範疇は不可視的であるとされる (Selkirk 1984 など)。このことから、CI と外在化は同じラベルを必要とせず、むしろ、CI で解釈されない要素が外在化で利用される、という解釈における非対称性原理を提案する。この仮説のもと、なぜ phase 全体ではなくその補部が音韻句として解釈されるのか、なぜ統語的に孤立した句がイントネーション句になるのかといった根本的な疑問に対し、原理的な説明を与える。

3. スカンジナビア語の目的語移動—統語移動が音声部門から要請される一例— 細野まゆみ

スカンジナビア語には、動詞が動くときに限り目的語代名詞も移動することができるという独特の移動現象がある (目的語移動、Holmberg 1986) が、文要素の移動が他の文要素の移動に依存するという現象は他言語に見られない。本発表では、目的語移動のイントネーション上の特徴から「スカンジナビア語において、目的語代名詞はダウンステップを引き起こすために移動する」との仮説を提案する。Labeling Algorithm (Chomsky 2013, 2015) の枠組みでは Criterial Position と呼ばれる位置に文要素が到達するとさらなる移動はできないとされているが、本発表では、目的語 (代名詞) がこの位置にいることを示したうえで「文要素は音声部門からの要請があるときのみこの位置からの移動が可能である」と定式化し、目的語移動は、統語移動が音声部門からの要請により起こる一例であると主張する。

4. 名詞修飾の語順と音韻 時崎久夫・稲葉治朗

ロマンス諸語、英語、ドイツ語、ロシア語などは、名詞を修飾する語句が名詞に先行するか後行するか、修飾句自体が主要部先行か後行か、修飾語句あるいは節が外置によって名詞から離れることができるか、などの点において異なる。ここでは修飾部として、語、複合語、句複合語、分詞句、冠飾句、関係節などを含めて考察する。発表ではまず、名詞とその修飾語句が同じ韻律句 (prosodic phrase) に入る、という音韻部門の制約を作業仮説として提案する。次に、その制約が名詞に先行する修飾語には適用するが、後行する修飾語には必ずしも適用しないことを観察し、それが外置の可能性の違いを生じることを述べる。最後に、韻律句の制約が、主要部名詞に先行する修飾語には適用するが、後行する修飾語には必ずしも適用しないのはなぜか、また各言語で名詞と修飾部の語順が異なるのはなぜかについて、音韻論と統語論およびインターフェースの点から考察する。

参考文献

- Berwick, Robert C. and Noam Chomsky (2011) The biolinguistic program: The current state of its evolution. *The Biolinguistic enterprise: New perspectives on the evolution and nature of the human language faculty*, ed. by Anna Maria Di Sciullo and Cedric Boeckx, 19–41. Oxford: Oxford University Press.
- Chomsky, Noam (2001) Derivation by phase. *Ken Hale: A life in language*, ed. by Michael Kenstowicz, 1–52. Cambridge, MA: MIT Press.
- Chomsky, Noam (2013) Problems of projection. *Lingua* 130, 33–49.
- Chomsky, Noam (2015) Problems of projection: Extensions. *Structures, strategies and beyond: Studies in honour of Adriaan Belletti*, ed. by Elisa Di Domenico, Cornelia Hamann, and Simona Matteini, 3–16. Amsterdam: John Benjamins.
- Holmberg, Anders (1986) *Word order and syntactic features in the Scandinavian languages and English*. PhD dissertation, University of Stockholm.
- Selkirk, Elisabeth O. (1984) *Phonology and syntax: The relation between sound and structure*. Cambridge, MA: MIT Press.